

フィリピン農家を通して日本農業を考えた

フィリピンの農家の人々約50名を福岡、佐賀、長崎に案内する機会を得た。酪農、水田農業、ジャガイモ、タマネギの生産現場を見たいという視察ツアーの企画担当者の要望に合わせて、本誌読者諸氏にご協力をお願いした。

スタディーツアーの最初は、僕自身による日本農業の現状と課題、そして可能性と題してお話した。

日本の農業GDPは国内産業全体の1%にも満たないが、世界のランキングで見れば10位。フィリピンでは2013年にコメ不足が社会問題化した。日本では1960年代からコメ余りが続いており、それに対して減反政策を40年以上続けてきた。さらに、我が国では

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

コメを飼料にしており、それに対して最大で10a当たり10万5000円の交付金が支払われる。フィリピンではトウモロコシの大増産が続いているが、飼料穀物の中心であるトウモロコシはすべて輸入に頼ってきた。我が国の農家の耕作面積は平均で2・7ha。今後急激に平均耕作面積は拡大していく。農業就業者の平均年齢が67歳と高齢化してお

り、やがてリタイヤすることで規模の大きな事業的農家が増えていくことになる。高齢化の進行が一気に日本農業の構造変化をもたらす。一方、全農家平均では、農家所得の53%は補助金である等々。

こうした数字を示すたびに、オーツという声を上げ、信じられないという顔で数字の真贋を確かめてくるフィリピンの人々を前にして、日本の農業、農家が世界からすればいかに特殊な存在であるかを改めて思い知った。訪ねた我が読者たちが語る農業経営、農業機械、販売額を聞き、そのすべてが驚きであったようだ。ただ、フィリピンの人々の国民性なのだろうか、彼らからすれば想像を絶する経営を聞いても臆することなく訪問先の人々に感謝のハゲをし、嬉々として記念写真を撮る。

水田農家であるが、カルビーとの契約栽培を始め、タマネギその他の畑作に取り組み佐賀のTさん。水田農家ながら、福岡の中心部に近く、基盤整備の進まない地域で一人気を吐き、乾田直播をはじめとする技術革新に取り組んで最大50kmも離れた農地での耕作もする福岡のYさん。水田での機械化はコンバインが一部

で使われている程度で、コメの乾燥も道路に糊を広げてというのが一般的な同国の人々からすれば100馬力超級のトラクターでドリルシードーによる乾田直播をする同氏の機械化に目を丸くする。この機械を一人で持っているのかと。粕酪で100数十頭を飼い、素晴らしい経営成果を上げているFさん。歩行型ティラーでの収穫が一般的な島原のジャガイモ生産は、彼らにもなじみ深いもののようにあったが、その販売単価や一農家の販売額を聞いてまたしても数字に誤りはないかと通訳に確かめる。しかも、災害による不作の場合に作物共済で救済されると聞いて感動する。最後の視察先は諫早干拓の企業農場。最先端のタマネギ収穫機械化体系や乾燥貯蔵施設を見て、彼らは何を思ったのだろうか。

日本でも最先端の機械化を見てうらやましがらる彼らに最後に付け加えた。農業機械化はその社会の産業化のレベルを無視して進めることはむしろ農村に失業をもたらしかねない。「最高より最適」を考えるべきなのだ。水を差すような話を止めた。でも、己の現在とは違う視察をして、それを合わせ鏡として己を見直すことは彼らにとっても視察を受け入れた人々にとっても価値あることだ。